



文 程 萬里
写真 ベン・クイントン

龍は永久に 吠える

中国では故事を題材にした影絵芝居が人々に愛されている。
その人形を彫る名工として知られる汪天穩は、
舞台を闊歩する「演者」をつくるだけでなく、
彼らが舞台に立ち続けられるよう、次世代の育成にも
力を注いでいる。



中国の名工、汪天穩は、「推皮走刀」の技を学んだ頃のことに思いを馳せる。
工程は難しく、仲間の多くが脱落していった。

昨年、ウエネツィア・ビエンナーレで、中国館に伝統の影絵人形劇を自動上演する超大型装置が展示された。巨大なスクリーンに特大の人形が投影され、中国人なら誰でも知っている物語が繰り広げられる。そこで用いられる革製の影絵人形を制作したのが著名な彫刻師（それはまさに革を「彫る」作業を要する）汪天穩だ。陝西省の省都西安市に構える工房に戻った彼が、ウエネツィアでの体験を興奮と共に語ってくれた。

「私にとって、今回のビエンナーレは伝統と現代を融合する試みでした。規模も形も工程も従来とは異なる影絵人形を2組出展したのですが、反応は非常に良いものでした。人形劇にはまだまだ発展の余地がある、ということでした。」
彼が熱くなる理由はまさにそこにある。「ビエンナーレを通して、私たちの技術は一歩前進しました。ふだんつくらないのが、今回は5メートル弱もあったので、いくつかの部分に分けて（作業を行い、最後に）組み合わせることとしたのです」。それほど巨大な人形なのだ。「ふだん中国では体験したことのない、ウエネツィアの気候から生じる素材の伸び縮みにも頭を悩ませました」と、彼は続ける。「中国は乾燥しているのですが、ウエネツィアに持つていくとたんでしまつて」と頭を振りながら苦笑する。「解決策を探るため、研究に研究を重ねた」のだという。

影絵人形劇——中国語で皮影——は、燈影戲あるいは影戲とも呼ばれ、動物の革を彫つてつくつたものや人物に光を当て、その影を布のスクリーンに映し出す、中国最古の演劇のひとつだ。前漢時代（紀元前206年〜後8年）に始まり、唐から宋の時代に栄え、民族的な表現形式として、今日も全国で盛んに行われている。

汪天穩は、50年以上にわたつてこの影絵人形を彫り続けてきた。中国では、各地方に根づいた特徴ある彫塑、陶芸、刺繍などの工芸分野における名人に対して、中国国務院が与える工業美術大使という称号があるが、彼は影絵人形の分野で工業美術大使の冠を与えられた唯一の彫刻師だ。左手に力を入れて革を押し進め、右手に握つた彫刻刀は動かさない「推皮走刀」の技術を初めて学んだ頃のことを彼は振り返る。革を彫る工程は非常に難しく、同時代に修業した仲間のほとんどが脱落していった。汪はひとり、粘

り強く努力を重ねて一流の域に達し、経済的に苦しい時期を乗り越えて技の奥義を身につけ、最高の影絵彫刻師に与えられる「皮影第一刀」の地位を得るまでとなった。彼は今、「汪氏皮影」と呼ばれる創造力溢れるチームを育てている。隅々まで細心の配慮を払った、洗練された優美な造形と、深淵とした鮮やかな色彩が彼の持ち味だ。

貴重な文化遺産としての価値を守るため、汪は一連の厳格な工程に従つて単人形を制

作する。これには、生皮の選別から人物や動物の造形まで、24の工程がある。

そのなかでも特に重要なのが、生皮の選別、なめし、下絵、転写、彫刻、着色、加圧脱水、組み立ての8つだ。汪が強調するように、こうした伝統的な手法によって、それぞれの人形に複雑さや斬新さが生み出される。

「これらの工程はどれひとつとして機械化できません。機械では職人の感覚通りの仕事ができないのです。手工芸というのは、本質的に手づくりでなければなりません」。彼の工房では、浸水・研磨・伸展の工程を改善することで、皮の伸び縮みを抑えている。

芸術作品は、作者の手柄や意欲と密接に結びついた精神的創造物である。汪は温厚、誠実で気取らない、落ち着いた雰囲気の人だ。しかし、ふだんは寡黙な彼も、影絵人形について語り始めると、途端に情熱がほとばしる。それはスケールの大きさと豪放さで知られる、陝西省に伝わる

中国最古の地方劇「秦腔」のようにいつまでも力強く響き渡る。彼は人形劇の起源や歴史、伝統と発展、特徴や様式に並々ならぬ関心を寄せている。彼の心には、人形劇に関する古文書だけでなく、職業倫理や慣習が深く刻み込まれているのだ。

「推皮走刀」の技術、その伝統と革新に捧げる情熱、そして、脆くなった昔の古い人形の鑑定やその繊細な修復作業、すでに途絶えた凶柄の整理や再現など、彼の功績は他に類を見ない。「単人形は演劇に用いられるだけでなく、伝統芸術や手工芸の展示会にも出品されるようになります。時代は変わっていますが、その変化に背を向けたら、社会から取り残されてしまう」と汪は考えている。

「人形劇をますます発展させ、次世代に伝えていくために、現代風にアレンジして世に広めていかなければ」という思いから、彼はこれまで、映画やテレビであれ美術展であれ、機会をとらえては影絵劇

【当ページ】
（左上）將軍の人形。本物の髭が使われている。人物も馬も尊大な表情を浮かべている。
（右上）着色する前の、半透明の状態の馬の人形。こうして光にかざしながら、鋭い彫刻刀で細部を彫っていく。
【次見開きページ】
木こりと朽ちた岸にまつわる故事「爛柯」の一場面を描いた繊細な彫刻。

【前見開きページ】
（左）影絵彫刻の第一人者、汪天穩とその娘、海燕。工房の前にて。
（右）汪は動物の人形に定評がある。このドラゴンの人形は40年前に彫られたものだが、今もなお生き生きと吠えている。
【当ページ】
（左上）扇彩を丁寧に教える師匠。汪の創造力溢れるチームの仕事ぶりには他に類を見ないほど素晴らしい。虎の猛烈なうなり声が聞こえてくるかのようだ。
（中）汪海燕が描く鳳凰は、彼女が輪郭を描き入れると突然、花を散きつめたかのように美しい光彩を放ち始める。
（右上）さまざまな刀幅の彫刻刀。

「これらの工程は
どれひとつとして機械化
できません。機械では
職人の感覚通りの
仕事ができないのです。
手工芸というのは、本質的に
手づくりでなければ
ならないのです」

を世に広めようと努めてきた。
2000年以上の歴史を誇る技術の継承者として、汪天穂は若い世代を特に重視している。「この仕事に興味を示す若者には、惜しみなく教えたい」と彼は言う。汪氏皮影が300人近い職人を擁する大所帯となっている理由はそこにある。彼の娘、汪海燕は、新人部隊のリーダー的存在だ。14歳の時から父のもとで人形づくりの繊細な作業を学んできた彼女は、すでに自分自身のスタイルと独創的な表現を身につけた一人前の皮影人形彫刻家に成長している。
「父の期待はとても大きいのです」と、彼女は誇らしげに話す。「娘だからと大目に見られることは全くありません。左手で革を自由自在に動かす、推皮走刀の技術をマスターするため、いつ

も両腕に重りをつけて作業をしていました。まるでオリンピック選手の強化トレーニングのようだ。「その重りは、どんなことがあっても外しませんでした。この道に必要なことは何であれ耐えなくてはいけない、というのが父の教えです。それから、肩をすくめる彼女は、仕事を完璧にこなしている。「こうして動機を与えてくれたことに感謝しています」と、彼女は言う。「父は、影絵人形の技術が自分の代で途絶えたり、質が低下してしまったりすることを恐れています。だから、教え子たちが自分を超えていくことを望んでいる。人形劇がより素晴らしいものになっていくことが何よりも嬉しいのです」。
娘の話を聞いていた汪天穂の表情が緩み、その顔に柔らかな笑みが広がっていった。

